

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0992500066		
法人名	医療法人社団 湘風会		
事業所名	グループホーム アベータ		
所在地	栃木県那須郡那珂川町馬頭2050-1		
自己評価作成日	平成24年10月10日	評価結果市町村受理日	平成25年3月29日

事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓ このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.jp/
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人アスク
所在地	栃木県那須塩原市松浦町118-189
訪問調査日	平成24年10月24日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

「ゆっくり・いっしょに・楽しみながら、一人ひとりのその人らしさを大切に生活支援に努めます」という理念を掲げております。入居者に寄り添いながら、家庭的で明るい雰囲気の中で生活していただけるように努めております。
--

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

本事業所は、併設されている小規模多機能型事業所も含め建物全体が南面を向いていて中庭もあるため、屋内全般に渡って陽が射し込んで明るい。玄関入り口には鉢植えの色とりどりの草花が咲き、訪問当日は南面のベランダに洗濯物や寝具類が天日干しされていて、生活感が感じられた。「ゆっくり」「一緒に」「楽しみながら」一人一人のその人らしさを大切に生活支援に努める」という理念を掲げているが、職員が見守りや介助をしている中で、入居者がそれぞれのペースでゆっくり食事をしていたり、食後は居間でテレビを見たり昼寝をしたりしてのんびりしている生活の様子から、理念の実践が図られていることが窺える。開設して4年目を迎え、行事に住民が参加したりして地域との交流も着実に広がっている。開設時期の頃から勤務している職員が半数を占めていることもあり、各種書類の内容や聞き取りからも、運営やケアの実践という面では安定した段階にあると思われる。
--

. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) 項目№1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項 目		取 り 組 み の 成 果 ↓ 該当するものに○印		項 目		取 り 組 み の 成 果 ↓ 該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、活き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価		
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
理念に基づく運営						
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	玄関に理念を掲示している。職員は理念を共有して実践している。	『「ゆっくり」「いっしょに」「楽しみながら」一人一人のその人らしさを大切に生活支援に努める』という理念を掲げており、定例会議(月1回)や毎日の申し送りの時に、職員間で随時確認をしている。食事の際も、入居者を急かすことなく、それぞれのペースで食べられるよう配慮しており、日中も個々人に応じた過ごし方でゆったりとした雰囲気が感じられる。		
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	スーパーに買い物に行ったり、理容店に出張理容に来てもらったり、行事にボランティアを招いたりしている。	職員の食材購入の際に、毎回1～2名の入居者も一緒に地元スーパーで買い物をしたり、地元理容業者に毎月来てもらい調髪をする機会を設けている。また行事に地域住民が参加したり、玄関にボランティアから届けられた手作り作品が綺麗に飾ってあるなど、地域との交流が日常的に行われていることが窺える。		
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	以前に地域の人に向けて認知症サポーター養成講座を行っており、今後も行いたい。			
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実践、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議では、役場職員・地域包括支援センター職員・民生委員・入居者・家族から意見をいただいて、運営に活かしている。	運営推進会議は併設の小規模多機能型事業所と合同で年6回開催されており、町担当職員や地域包括支援センター職員、民生委員、入居者やその家族が出席し、情報や意見の交換を行っている。会議資料には、行事だけでなく日常生活場面の写真も掲載して、出席者に事業所運営への理解を深めてもらうようにしている。会議の際にボランティアの紹介をしてもらうなど、会議内容を運営に生かしている。	運営推進会議の議事録が作成されていないことが何回かあるので、会議結果を職員に周知するとともにその後の運営に反映させていくことが必要であることから、今後は毎回必ず会議結果を文書にまとめ、回覧等により職員間の情報共有化を図ることが求められる。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	運営推進会議で役場・地域包括支援センターの職員に事業所の実情や活動を報告して、助言や指導をいただいている。	町担当職員は運営推進会議に毎回出席してくれるため、事業所の実情を報告したり色々な情報や運営上の助言などをもらい連携をしている。地域包括支援センターからの、空き状況や入居者の生活状況の問い合わせなども多くある。またセンター主催の事業者間連絡会議(年6回)で、事例検討会や講演などが行われるので、交代で職員を参加させ職員の資質向上にも努めている。		

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	全職員が身体拘束をしないように努めている。これから身体拘束廃止のためのマニュアルの研修を行いたい。夜間以外は玄関の施錠は行っていない。	拘束禁止に係るマニュアルは作成済みであり、職場研修会等で職員への周知徹底を図っている。玄関は日中は無施錠であり、外に出てしまう入居者はいないが、仕切りのガラス戸を開けて玄関口まで行ってしまうこともあるので、職員が常に気を配り、様子を見て寄り添いながら戻ってもらうようにしている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	管理者・職員は、事業所・自宅で虐待があってはならないという認識を持ちながら、利用者を尊重して介護している。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	管理者は権利擁護に関する制度を理解しており、今後必要があれば活用してゆきたいと考えている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	管理者が契約書の内容・改定された内容を丁寧に家族に説明している。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	管理者・職員は、利用者からは随時要望を聞いており、家族からは面会に来た時や会議の時に要望を聞いている。	入居者には、必要に応じて職員が声をかけをして、望んでいることや思っていることなどを聞き取るようにしている。家族に最低でも月1回は面会に来てもらうため毎月の利用料を直接事業所に支払ってもらうようにしており、そうした際に色々家族の意見や要望を聞いて、入居者のケアの見直しや運営の改善等に繋げている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	施設長・管理者は、定例会議の他にも随時職員からの意見を聞きできるだけ運営に活かしている。	定例会議で、行事・入居者の生活状況・業務改善等の項目について話し合いを行っている。最近では、職員の意見を受けて、夜勤者が夜間に記録を書く場所の照明が入居者の部屋を照らしてしまうため、小型のLED照明器具を購入したことや、入浴・清拭の回数や方法を改善したことなどの例がある。	定例会議の議事録が作成されていないことが何回もあり、あっても記述内容が不十分であったりするので、今後は毎回必ず会議結果を文書にまとめ、回覧等により職員間の情報共有化を図ることが求められる。
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	施設長は職員からの要望を直接聞いたり、管理者を通して聞いたりして、職場環境の整備にできる限り努めている。		

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	施設長は管理者に定期的に事業所内研修を行うように勧めており、管理者・ケアマネを事業者外の研修に参加させている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	施設長は管理者・ケアマネを地域ネットワーク会議に参加させて地域の同業者と交流したり勉強したりする機会をつくっている。		
.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	職員は本人が安心して困っている事や不安な事を話せるような雰囲気を作り、話した事を丁寧に聞くように努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	職員は家族が安心して困っている事や不安な事を話せるような雰囲気を作り、話した事を丁寧に聞くように努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	本人・家族の要望を聞いた上で、まず必要としている支援を見極めている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	職員はできるだけ入居者と一緒に家事や食事を行っている。		
19		○本人と共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	職員は定期的に家族に入居者の状況を伝えながら、家族と入居者が触れ合う機会をつくるように努めている。		

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
20	(8)	○ 馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	職員はまず家族との関係が途切れないように家族と入居者が触れ合う機会をつくるように努めている。具体的には電話で話しをしてもらったり面会・外出や行事への参加を促したりしている。	家族の面会がほとんどであるが、時々近隣に住んでいる入居者の知り合いの方が訪ねてきて入居者と談笑していることもある。入居者から家族への要望等がある場合は、状況を見て直接電話に出てもらい家族と話し合いをして、理解と繋がりを深めてもらう方法を取ることも行っている。行事への家族の出席率は高いとのことである。	
21		○ 利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	職員は難聴や発語困難な入居者でも他の入居者と意思疎通ができるように、言葉の伝達を代行している。		
22		○ 関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	必要があれば家族からの相談に応じて、支援させていただく。		
. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○ 思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	これまでの生活歴を参考にしながら、本人・家族から生活の意向を確認している。	言葉でうまく表現出来ない入居者の場合は、表情や仕草などを見て、思いや感じていることなどを読み取るようにしている。入居前からおかゆを食べていて入居後も同様におかゆにしていた方がいたが、職員が何とか思いを聞き出して「普通の御飯が食べたい」ことが分かり、変更して喜ばれた例がある。	
24		○ これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	本人・家族から生活歴や生活環境等を確認している。		
25		○ 暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	本人・家族から一日の過ごし方や心身状態等を確認している。		
26	(10)	○ チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	毎月の定例会議の中で、カンファレンスを行い、本人・家族の意向を踏まえながら、介護計画を作っている。	定例会議でのカンファレンス及びモニタリングの結果や家族の意見・要望等を受けて、サービス担当者会議で検討した上で、計画作成担当者を兼務している管理者が介護計画を作成している。介護計画の急な変更が求められる状況が発生した場合も、対応がスムーズに行われている。	

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
27		○ 個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々の様子・ケア内容・気づき等を個別記録に記入することによって、職員間で情報を共有しながら介護している。		
28		○ 一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	新たなニーズが生まれた時は、職員間で適切な対応を検討して実行している。		
29		○ 地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	馴染みの床屋に散髪に行ったり、スーパーに買い物に行ったり、ボランティアと交流したりしている。		
30	(11)	○ かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	家族が受診の付き添いができない時は、看護職員やケアマネが代行して、変化があればそれを家族に報告している。	かかりつけ医への定期受診は家族の付き添いを原則としているが、家族が出来ない時は看護師が付き添って受診し、その結果について電話や口頭で家族に伝えている。緊急時には、家族に連絡した上で介護職員が看護師が付き添って病院に同行し、家族の到着を待つような対応を行っている。	
31		○ 看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	介護職は、入居者の変化を看護職に報告して、入居者が適切な看護を受けたり受診ができたりするようにしている。		
32		○ 入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	病院から退院予定の連絡があれば、現在の状態を確認して、施設で本人に合わせた生活ができるように、速やかに準備をしている。		
33	(12)	○ 重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所のできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	現段階では医療の必要性が高い入居者に対応することは難しいため、その事を入居前に本人・家族に説明している。	終末期の対応については、入居時に家族に対して「医療体制が整っていないこともあって、ここは終の棲家ではない」ということを説明しており、状態に応じて医療機関や保健施設への移行について相談できる体制としている。マニュアルは作成されていないが、重度化について職員と何回か話し合いをしている。	職員との話し合いで重度化についての理解を深めて方針を検討し、今後対応マニュアルを作成することを期待したい。

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	昨年12月に消防署職員による心肺蘇生法・AED使用法の講習を受けている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	今年5月に消防署職員の立会いの下で地震と火災を想定した避難訓練を行っている。今年中に夜間を想定した避難訓練も行う予定である。	5月に消防署職員の立ち合いで地震・火災避難訓練を行ったが、その反省点を踏まえて職員間で話し合いを重ねた。11月には夜間想定避難訓練を実施する予定である。現在の「防災及び非常災害対応マニュアル」は見直しが必要と考えているとのことである。	初めての夜間想定避難訓練を行うに当たって、地域住民の協力について運営推進会議で確認をしていただきたい。マニュアル見直しの際は、より具体的な対応を盛り込んだ内容にすることが望まれる。
その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	入居者の人格を尊重した上で、丁寧な言葉遣いで話すように努めている。他の入所者に聞かれない内容の話は、他の入所者に聞こえないように配慮している。	個人情報他入居者の前では話さないように注意している。難聴の方には理解出来る範囲の声の大きさで話したり、意思の疎通が難しい方には声かけ時の顔の表情や行動で判断している。不用意な声かけや接し方にはそのつど職員間で注意したり定例会議で話し合い、適切な対応方法の共有化に努めている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	自分の希望を表すことが難しい入居者には、職員がまめに希望を確認するよう努めている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	リビングで他の入居者と過ごしたいのか居室で休みたいのか等入居者に確認して希望にそって支援している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	入居者が清潔な体に清潔な衣服を着て生活できるように支援している。入居者は毎日入浴または清拭を行っている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	入居者は職員と一緒にテーブルを拭いたり食器を片づけたり洗ったりしており、その入居者はやりがいを持って家事ができている。また食事で嫌いな食材は代替りの物を提供している。	食事は2か所の業者から調理済みのおかずを購入しているが、御飯と汁物は職員が調理しており、きざみやペーストも職員が行っている。音楽が流れる中で、職員は見守りや介助で、入居者が自分のペースでゆっくり食事が出来るように心がけている。入居者の中には自ら食器を洗い場まで運ぶ方や、テーブルを拭く方などいて、自分の出来ることはやってみようようにしている。	

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事は栄養バランスのとれた物を入居者の状態によって加減して提供している。水分は入浴・レクリエーションの後にも補給していただいている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、入居者を洗面所に誘導して一人ひとりの能力に応じた口腔ケアをしている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	入居者一人ひとりの排泄パターンを把握してトイレに誘導したり、一人ひとりに応じた排泄前後の支援を行っている。	自立や一部介助でトイレで排泄する入居者が多い。全員リハビリパンツや布パンツとパッドを使用していて、オムツ使用の方はいない。排泄チェック表で排泄パターンを確認し、職員がトイレに誘導している。トイレは3か所あるが、入居者に分かりやすくするためトイレの表示の色が変えてある。誘導もスムーズで排泄後の処理対応も素早く行われている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	入居者の食事には野菜やヨーグルト・チーズ等の乳製品を多く提供するようにしている。また、体操やレクリエーションで運動する機会を作っている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	午後から、準備ができた入居者より入浴または清拭を行っている。入居者の希望を聞きながら週に2～3回入浴していただく。	午後が入浴の時間帯で、1日に1～3名が利用するようにしていて、職員は入居者がゆっくり入浴できるようにこころがけている。一人当たり週2回から3回入浴し、その他の日は失禁や汚れた時、汗をかいた時など、状態に応じて清拭をしている。脱衣所は床暖房になっており、風呂場も整理が行き届いている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	入居者の希望を聞きながら、好きな時にリビングのソファや居室ベッドで休んでいただく。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	職員は入居者一人ひとりの薬について理解しており、決められた時に内服・点眼・塗布の支援を行っている。症状の変化は記録して看護職・介護職で共有している。		

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	職員はなるべく入居者と一緒に食事の準備・後片付けを行うように努めている。入居者にはそれが楽しみの一つとなっている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	施設の周りの植物・草花の観察等は入居者から希望があればその日のうちに行えるように支援している。入居者から帰宅要求があった時は家族に協力してもらえる日に帰宅していただいている。	季節のお花見や美術館見学などの外出時に、入居者から希望を取り外食も行っている。毎月1回職員と共に1～2名の入居者が買い物外出で生活用品を買いに行っているが、まだ自立歩行の方のみで車椅子利用の方は行っていない。帰宅願望のある方には、家族と相談して面会や外出・外泊をする等の対応を行っている。10月の外出行事のいも掘りで収穫したさつま芋は、手作りおやつ材料として使われている。	車椅子利用の入居者もできるだけ出かけられるように検討をして、今後も入居者の希望に沿った外出や買物を続けていっていただきたい。
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	入居者の現金は事務所で預かっているが、外出時に入居者は自分の現金で買い物をすることができる。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	入居者が希望する時に家族等に電話をすることができるようにしている。。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	共用空間は、清潔にして入居者にとって快適な明るさ・温度となるように支援している。	天窓があるうえに他の窓も広くて光が入りやすく、明るい雰囲気である。壁には入居者が各自の出来る範囲で作成した塗り絵や切り絵の作品が飾られ、中庭の木の紅葉で季節が感じられる。食堂や居間は床暖房になっていて朝から暖かで、午前中は体操や歌など声を出したり運動したりしている。午後はソファでテレビを見たり昼寝をしたりと、それぞれがのんびりと好きなように過ごしている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	他の入居者と距離を置きたい入居者はリビングにおいては他の入居者と離れた席に座っていただいている。		

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのもをを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入居者は自分の使い慣れた物を居室に持ち込むことができるが、まだ衣服・寝具の他に持ち込まれている物が少ない入居者も見られる。	部屋の入口の花のプレートに名札があり、室内には各自使い慣れたタンスやぬいぐるみ、ソファ等を置き、カレンダーが壁に貼られている。部屋の掃除や整頓は入居者自身とする方も、職員と一緒にしている方もいる。ベッドだけではなく、入居者の状態により布団に変更して転倒を防いでいる例もある。	居室によっては持ち込まれる品が少ない印象を受けるので、家族と相談して、入居者が居心地よく過ごせるように好きな物や使い慣れた物を部屋に置くなどの工夫をしていただきたい。
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	床に段差がなく、通路・トイレ等には手すりが設置されて、トイレ入り口には案内表示がある。		